救世軍公報

GOOD NEWS ときのこえ

War Cry

9月号
福音版
2020
September
No.2805

二〇二〇年　九月一日　発行

明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行（除く七月）

創立者　ウイリアム・ブース　大将　ブライアン・ペドル（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　ケネス・メイナー（救世軍本営　東京都千代田区）　https://www.salvationarmy.or.jp

令和２年７月豪雨により被災された皆様に、謹んでお見舞い申しあげます。復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

永遠の生命

山室　軍平

九月二十二日は、日本で救世軍の働きが開始されて百二十五周年の記念日です。日本人初の救世軍士官（伝道者）山室軍平の文章を一部編集し、掲載します。

キリストを信じて最もありがたいことは、いつ何時この世を去っても、安心して行くべき目当てがあることである。人が神様に逆らい、罪咎を重ねる間は、この世で心配、苦労と不幸せの中に日を過ごすばかりか、死後には、あの世で限りない刑罰を受ける。しかし、人が罪を悔い、心を改めてキリストの救いを受ける時には、もはやいつ死んでもきっと天国に入る目当てができる。これは、クリスチャンがいただく特別な恵みである、と言わねばならない。

天の神様を拝まず、またキリストの救いを受けない人には、死んで行く先がわからない。かえってこの世での罪咎の報いを恐れて、震えおののくばかりである。

フランスのある女優は、死ぬ間際に各種の宝石をいじりながら、「私はこんなにもあっという間にこれらのものと別れなければならないのか」と嘆いたという。トマス・ペインというキリスト教の反対家は、息を引き取る前に、「ああ、私は真っ暗がりに飛び込まなければならない。どんなに不可解な運命だろう」と言って悲しんだ。日本でも、一休和尚が臨終にその枕元に取り巻く弟子たちに向かって「死にともない（死にたくない）、死にともない」と言って意外に思われたとか。または、俳句で名高い一茶が、その子を亡くして諦め切れず、「露の世は露の世ながらさりながら」と詠んだ、というような話はずいぶん多く伝えられている。それゆえ、わたしたちは、キリストを信じて、その救いを受け、いつ死んでもさしつかえない支度が整っていなくてはならない。

ルターは、臨終の際に、「我が霊魂をあなたの御手に任せます。あなたは私を贖ってくださいました。ああ、真理の主なる神様よ」と言って安心してこの世を去った。（中略）ジョン・バニヤンは、そばにいる人々に向かい、「私のために嘆いてはならない。自分たちのために嘆きなさい。私は罪深い者だが、疑いもなくキリストに救われて、天の父上（神）のもとに行くであろう。そこで間もなく、諸君と今一度めぐり会い、新しい歌を歌って神様を賛美することを望む」と言って、長い暇を告げたのである。（中略）ジョン・ウェスレーは、「最も善いことは、神が私たちと共におられることである」と言い、安らかにこの世を去った。（中略）救世軍の創立者、大将ウイリアム・ブースがこの世で最後に述べた言葉は、「あなたが、もし、ただ信じるなら、神の約束は確実である」であり、これは聖書の教えに対する、篤き信仰心を言い表したものである。

京都に同志社という学校を興した新島襄氏は、大磯の旅館にて幾人かの弟子に取り巻かれながら、まさに死ぬ寸前に新約聖書エフェソの信徒への手紙三章を読ませ、最後の言葉（20節）「わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に」の箇所にくると、「そこだ、その力ある神様を頼りに、我が亡き後のことを善きに計らわれたい」と言い残して、この世を去った。

昔の人の歌に「かかるとき、さこそ命の惜しからめ、かねてなき身と思ひしらずば」とあり、死の準備のできていない人は、まさかの時にあわてるものである。けれども、キリストに救われて、死んで行く先の定まっている人には安心がある。あわてる必要もない。ゆえに、いつも、生活のちょっとしたことにも心を驚かすような恐れがない。

あなたは、死んでから行く先についての用意を整えているか？　人の命は明日をも計れないものである。ことわざにも「老少不定」というではないか。聖書には「自分の神と出会う備えをせよ」（アモス書4章12節）とある。今という今のうちに、すみやかに罪と咎とから救われ、いつ死ぬことになっても、恐れず、惑わず、神様の前に出られる用意を整えることが何より大切である。（『十字架の教』大正5年12月発行　より）

Photo credit: enneafive on Visualhunt / CC BY

WINDOWS on the ARMY WORLD　世界をみつめて

〈全世界〉新型コロナウイルス感染拡大に対する取り組み（続報）

救世軍は、世界の65カ国で112の緊急支援プロジェクトを進めています。「コロナ禍」と言われる中、7月2日の救世軍155周年創立記念日に合わせて、創立者ウイリアム・ブースの言葉「私は戦う！（I'll Fight）2020」のタイトルで、動画が配信されました。

創立者は最晩年に、女性が泣き、子どもが飢え、罪の中に人生を送る人のある限り、私は戦う！　という宣言を遺しました。動画では、コロナ禍にある人々に食料や衛生品を届ける支援や医療の現場（アルゼンチン、オーストラリア、ブラジル、カナダ、デンマーク、エルサルバドル、フィンランド、フランス、ガイアナ、日本、メキシコ、ニュージーランド、ナイジェリア、ルーマニア、スリランカ、タンザニア、ウクライナ、英国、米国、ザンビア）から、それぞれの国の言葉で、創立者の宣言に呼応する一言を宣言しています。

世界の支援状況は、救世軍万国本営（国際本部）のサイトで随時更新されています。（https://www.salvationarmy.org/ihq/home）（写真はグアテマラでの支援）

@SArmyJP　SArmy_JP　救世軍 The Salvation Army

〈日本〉令和２年７月豪雨による被災地支援

○熊本県の被災地のため、九州キリスト災害支援センター（九キ災）に協力して支援をおこないました。7月12日（日）には、近年豪雨被害を経験し、対応した、キリスト教会広島災害対策室（救世軍も所属）と協力して、熊本での復旧支援に必要な物資を直接九キ災の益城ベースに届けました。（写真右上 広島で支援物資を積んだトラックと共に）

○岐阜県では、7月14日（火）、東海キリスト者災害ネット（救世軍も所属）より情報を得、関キリスト教会（改革派）と協働し、マスク、土嚢袋、消毒スプレーなどの支援物資を、下呂市小坂町で配布しました。（写真右下 岐阜県の被災者への支援物資）

速報！

第四回 救世軍社会鍋俳句コンテスト 受賞作品発表

新型コロナウイルス感染予防対策に伴い、募集期間を一カ月延長したところ、全国各地の百四十三名より二百七十作品の応募がありました。心より感謝申し上げます。

左記の作品が受賞いたしました。おめでとうございます。

最優秀賞

一杯の椀に優しさ社会鍋　受賞者　浅原　佑斗

優秀賞

星屑のやうな硬貨や社会鍋　受賞者　田中　真希

マスクする人の輪の中社会鍋　受賞者　廣木　信子

社会福祉部長賞

亡き母の意思を引き継ぎ社会鍋　受賞者　渡辺　道代

ほのぼの賞

豚貯金空っぽにして社会鍋　受賞者　白井百合子

握りしむる子の温度なり社会鍋　受賞者　夏　舟

タンバリン銀座に舞いて社会鍋　受賞者　堀越　静江

選者・唐澤南海子氏（現代俳句協会会員、「岳」無鑑査同人、日本基督教団 信濃町教会員）

今回、授賞式の開催が難しいため、受賞者へは直接賞状と記念品をお届けいたしました。選者・唐澤南海子先生による講評を『ときのこえ』（広報版 初秋号〈九月十五日発行〉）に掲載いたします。

発行日及び定価
▼発行日
福音版・毎月一日発行
広報版・奇数月十五日発行（除く七月）
▼定　価
福音版・一部　四〇円
広報版・一部　一〇〇円
クリスマス特集号（十二月一日号）・一部　一〇〇円
振替・〇〇一八〇―五―四四〇〇
発行兼印刷人　救世軍　代表者　ケネス・メイナー
編集人　寺澤　眞由子
〒101―0051　東京都千代田区　神田神保町二―十七
電話　東京(03)三三七〇―八八一
発行所　救世軍本営
印刷所　ビーアンドエス

（取扱支部）

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会

信仰の体験談
証言のページ

キリストを知る

救世軍士官
石坂　奈緒美さん

＜プロフィール＞
保育士として7年間勤務した後、救世軍士官（伝道者）となった。現在、救世軍岡山小隊（教会にあたる）、福山小隊（広島県）で夫と共に働きを進めている。
（写真・社会鍋募金による支援として、岡山市内の学童クラブにおもちゃ等をプレゼント。石坂さんは左）

※右下のQRコードで、石坂さんが参加したタンバリン操練を視聴していただけます

新型コロナウイルス感染症は、生活の中に多くの緊張感と多種多様な制限をもたらしました。岡山県にある救世軍の小隊（教会にあたる）で伝道活動をしている石坂奈緒美さんが、「コロナ禍」と言われる春からの日々を振り返りつつ、御自身の信仰について語ってくださいました。

神様の愛を託されている岡山小隊で何かできることは、と祈りつつ

この春から、自粛生活が要請され、毎日のニュースで、働く親の困った状況、それに伴う学童クラブや保育園の問題、テレワークの中、子どもの世話に苛立つ家庭、家庭内での虐待に怯える人、ネットカフェ休業のため行き場を失った人人……、といった現実を聞きました。これは国の非常事態、国難だと感じています。

「神様、あなたの愛を託されている岡山小隊に何かできることはないのでしょうか。大きなことはできませんが、小さなことでも何か地域に仕えたいのです」と私は祈りました。休校で毎日の食事作りに困っている親を助ける子育て支援を考えましたが、ウイルス感染拡大防止策下での、食べ物の提供には不安があり、マスク不足で困っている方のために、布マスクを配布しては？　と思いました。

コロナ終息を祈りつつ、神様の愛を込めて作った三百枚のマスク

三月、自分一人では、できることは限られていると思いつつ、試作品を信徒や近所の方に差し上げてみると、思いのほか喜んでくださいました。布マスクの効果も不確かでしたが、喜んでくださった姿は、神様が私の背中を押してくださったように思え、〈どれだけできるかはわからないけど、やってみよう〉と決心しました。

そんな思いを周りに話すと、家にあるさらし布をくださる人や、一緒に縫うと言ってくださる信徒がありました。東京に住む、縫い物の得意な八十八歳の母からは、アドバイスや、布、手づくりマスクが届きました。各地の救世軍の仲間も、さらし布がないと聞けば洗濯して送ってくれ、マスクのゴムや布、同封したらよいと思われる聖書の言葉が書かれたカードを送って応援してくれました。信徒からは、地域の学童クラブ、街頭生活者支援グループ等を教えてもらい、つながりをもつきっかけを得ました。ある信徒は、「このマスクは救世軍の先生が作ったのよ」と仲間に宣伝してくれ、配布先を広げてくれました。そのような動きの中で、私の祈りと願いが広がっていくことを実感しました。

三月の一カ月は、マスクを縫いながら祈る生活を大切にしました。毎日起こる出来事に心を寄せ、助けを必要とする方々を思い起こし、その祈りを書き留めてカードにしていきました。個人的にも「何か新しいことをしてみたい」と思っていたので、ツイッターを始めて、日々の祈りをつぶやくことにしました。

祈りながらマスクをゆっくりと縫いたため、四月中旬より配布を始めました。養護施設、地元の表町商店街、救世軍でおこなっている募金の協力者、近所の学童クラブ、作業所等六月末まで、延べ約三百枚配布しました。

商店街の整骨院では、先生が『ときのこえ』を読んで、救世軍の活動に理解を示して、受付にマスクを置いてくださるようになりました。整骨院に毎週十枚届けていますが、欲しい方が持って行き、中には、社会鍋にと献金を置いていってくださることがあり、感激しています。「皆さん、救世軍の社会鍋をよく知っていますよ」と先生がお話ししてくださったことは、励みになりました。そして、岡山小隊が、長年この地で、地味ながらも神様と人とに奉仕してきたことを再確認させていただくことができ、うれしくなりました。

七月二十六日、救世軍の活動が岡山で開始されて百二十五年目を迎える記念日（救世軍が来日した翌一八九六年に岡山での活動が開始）にもその思いを強くしました。

救世軍佐野保育園での思い出～保育園で園児たちがストライキ!?

私と救世軍との出合いは、三歳の私が、母と歩いている時、「ここ」と保育園を指さしたのがきっかけです。その後、母は、私をその救世軍佐野保育園（栃木県）に入園させてくれました。

保育園では、毎日神様に祈り、賛美歌を歌い、聖書の話を聞き、先生方から愛をいただきました。三年間、幼児期の生活リズムを整え、私の心を開いて、体と共に魂まで充分に養い、育ててくださったと思っています。

「神は良しとされた。」

創世記一章に何度も出てくるこの言葉は、三歳の私が覚え、素直にそのまま受け入れた御言葉です。魚が嫌いで食べなかった私が、創世記の話を聞き、この言葉を覚えて帰ってきた日に、「神様はお魚も良しとされたんだって」と言って魚を食べたそうです。この御言葉はその後も折あるごとに、嫌な出来事や受け入れがたい人間関係をスムーズに導き、助けてくれました。

月曜から土曜は保育園に通い、日曜は保育園と同じ建物の佐野小隊での日曜学校に行くようになりました。ほぼ三百六十五日救世軍にいました（笑）。卒園後も、小隊に家族と共に通うようになり、我が家に神様の恵みが流れ込んできました。

当時、小隊の責任者だった救世軍士官（伝道者）は、二人とも園長と職員を兼任していて、園児、職員、保護者のケアと小隊活動をしておられました。その姿を私は傍で見、子どもながら、〈楽しいなあ、何かお手伝いはないかなあ〉と士官の後をついてまわっていました。救世軍で神様を賛美するために用いているタンバリン操練（型を決めて音楽に合わせて叩くこと）を五歳から習い、社会鍋も大好きで、毎年全期間参加しました。

私が年長児だったある時、野良犬が保育園に迷い込んだことがありました。子どもたちは大喜びでその犬を可愛がり、自分の園児服をかけてやったり、おやつをこっそり残してあげたりするほどでした。保育園としては、野良犬が子どもに害を与えては大変だと思ったに違いありません。ある日、園長先生は年長組の私たちに「犬は明日保健所に連れて行かなければなりませんので、今日でお別れです」と言われました。子どもたちはがっかりし、先生を鬼のように冷たいと感じました。翌日登園すると、犬はいません。子どもたちは失望のあまり、怒ってストライキを始めたのでした。担任の先生の言うことを聞かず、保育をボイコット。昼食もおやつも食べずに先生を困らせ、〈犬がかわいそう。どうしてそんなことを先生は平気でできるの？〉と先生への信頼が崩れかけていたのでした。数日後でしょうか、園長と先生方が動物のぬいぐるみやおもちゃをたくさん買ってきて、どうしてそうしなければならなかったのか、説明してくださいました。そして、子どもたちの優しい気持ちに感謝して、寄り添ってくださいました。そのおもちゃを見た途端、先生の心が伝わってきたことを今でも忘れません。五歳の子どもときちんと向き合ってくださった先生方の姿勢に、イエス様ならどうされるだろうか？　と子どもたちに寄り添おうとしておられた先生方の心が想像できます。

毎日歌ったこの歌は、子どもながらに真剣な祈りでした。

「神さま、神さま　神さまよ～　わたしの知らない良いことを　教えて良い子にしてください」

中学二年の時にイエス様を信じ、救いの経験を得ました。今、人々の必要に心を寄せてできることは何？　イエス様なら、今何をされるだろうか？　と考えられるのは、救世軍を通していただいた愛のおかげです。

イエス様が選んでくださったことに気づかされ、衝撃と心の平安を感じました

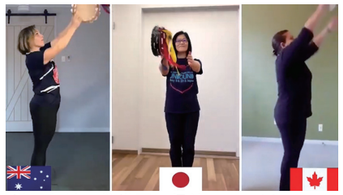
また、中学生の時に、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネによる福音書15章16節）というイエス様の言葉に出合いました。それまで、自分が救世軍を、イエス様を選んだと思っていましたが、先にイエス様が私を選んでくださっていたことがわかり、衝撃を受け、うれしさでいっぱいになり、大きな力で守られているという心の平安を初めて感じました。

イエス・キリストを知ることが、徐々に私を変えていきました。泣き虫だった私の心は聖書の言葉で強くされ、一つ一つのことに自信を得、立ち向かうことができるようになったのです。

保育園・救世軍が大好きだった私は、キリスト教の保育園の先生になりたい、と、上京してミッション系の短大で保育士の資格を取りました。数年、キリスト教主義の保育園で働いた後、救世軍城東保育園に就職し、一九九一年に結婚しました。城東保育園の完全閉園まで勤める中、救世軍士官としての献身を神様が望んでおられると示され、夫と共に一九九四年三月末に献身。救世軍士官となって、今年、二十五年目を迎えています。

五月頃から熱中症対策に、と夏用マスク（保冷剤を入れるポケット付）を作り、岡山でのマスクを通しての出会いを、福山でもやってみようと思っていたところ、神様は、救世軍士官をめざす候補生（神学生）を夏の実習のために福山小隊に送ってくださいました。作りためた百四十枚の夏用マスクの一部を、候補生に近所で配布してもらうことができました。新型コロナウイルスと暑さに負けず、この時を乗り越えていただきたいという祈りを添えて、マスク伝道を続けています。

佐野小隊（保育園）で（母、祖母に囲まれて）



世界各地の救世軍の信徒でステイホームでのタンバリン操練を一緒に、と声がかかり、参加（中央。右ページQRコードで視聴できます）

キリトリ

ご氏名

ご住所

□私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。